

立教開宗七百五十年記念出版

読むべき「世雄偈」の大切さ

廣田頼道著

序 文

日蓮大聖人様の読まれていた御経（「世雄偈」）を
読むことは、日蓮大聖人様の説かれた正法を信仰す
る私達にとって、とても大切なことだと思えます。

私が今迄発行して来た「芝川」誌の中で、

- ① 「芝川」 No. 6号（一九八八年5月20日発行）
- ② 「芝川」 No. 7号（一九八八年11月31日発行）
- ③ 「芝川」 No. 8号（一九八九年6月25日発行）
- ④ 「芝川」 No. 9号（一九九一年3月1日発行）

本文中①②③④の番号の所がそれぞれの号数
と認識して下さい。

全体の主旨は変えていませんが、少々の添削
推敲をさせてもらった。

四編を編集した為、重複する点は容赦頂きた
い。

の四回にわたって、勤行について考える（一）（二）（三）（四）
を掲載した。加えて、一九九三年（平成五年）九月
二十八日・二十九日両日に行なわれた正信会教師講

習会の二十八日の発表の席上においては、「芝川」
誌の中で指摘して来た。方便品の世雄偈を普段の勤
行に際して読むべきであることを。発表時間の限ら
れた中で「読むべき世雄偈の大切さ」という題名の
資料コピーを出席の全員に渡して御話しをさせて頂
いた。

一九八五年から現在迄17年間、このことに関する
議論を喚起したいと思つて発言して来たけれども、
「芝川」 No. 6号が絶版になつてしまったことと、最
近今迄送り続けて来たある人から、「芝川」誌の今
迄の号を送つてくれと依頼され、「芝川」誌が読ま
ずに捨てられ、読んで捨てられ、議論する心もない
まま無視されて、自分達の信仰内容に立ち入って考
えることもなく時間が経過して来たことを痛切に感
じました。

二〇〇一年は、この三宝山が福山布教所として一
九八一年に開所され二十周年目に当ることから、
「世雄偈」を読みはじめた当初から、大切な法要に
「世雄偈」を入れて読経し法要を営みたいと思い、
又、大切な御経と言いつ、一番大切な法要に読まな
いのはおかしいではないかとの批判も当初からあつ

た為、教区の方にもこのことを御願ひし、二十周年の法要と十月の御会式を、この年を期に今後は「世雄偈」を入れて営むようにさせて頂いた。

今迄の二十年間、この矛盾を何かの機に解消したいと思つて来たことが実行出来、僧俗共に二十周年法要と御会式を普段の勤行と同じ様に（世雄偈を入れ）出来、御宝前に二十年の歳月を刻むことが出来た報恩謝徳の志を報告することが出来ました。

立教開宗七百五十年の大切な年に、改めて四回にわたる論文を一冊の本にし、もう一度「読むべき世雄偈の大切さ」を多くの人に考え、感じて頂きたい。芝川誌を捨てて来た人も、無視して来た人も、改めて手に取つて読んで貰いたい。そして読み捨ての雑誌の認識ではなく、薄くとも一冊の本にして残り、私が死んだ後も、日蓮大聖人様が読まれていた「世雄偈」の内容を踏まえて勤行に読経することの大切さを考えてくれる方が出てくれれば、仏教の為ありがたいと思ひ、出版することとしました。

廣田は、世雄偈を読まない者は謗法であると言つているという過激な揚げ足取りの批判があります

が、私はそんなことは言っていない。あくまでも御経は御題目の説明であつて、成仏の有無は御題目にかかつてゐる。世雄偈を読まない者は謗法だということとは、言い換えれば世雄偈を読まなければ成仏出来ないと私が言つてゐるという指摘であります。そんなことを私はまったく考えていない。

日蓮大聖人が読まれていた世雄偈の御経を修行として大切に読んで、御題目の大切さをより深く感じ行こうということだけなのであります。

最後に載せた手書のプリントは、昭和六十年に、三宝院の御信者に啓蒙する時の勉強会のテキストであります。

合わせて御読み頂き、御理解を深めて貰いたいと思ひます。

多くの御信者さんに理解して頂けるように書いたつもりであります。大石寺の人達、創価学会の人達、日蓮系の信仰をしている人達が、この本を読んで日蓮大聖人様の勤行の原型はどうだったのかを深く考えて頂ければ仏恩報謝の為ありがたく思ひます。

読むべき「世雄偈」の大切さ

①

私が身近に信徒と接するようになってから今日に至る迄、大変気になることがありました。それは御経の読み方、題目の唱え方であります。

速いテンポで唱えている時は、さほど感じることはないのですが、葬式とか法事の時にはつきりと発音のわかるテンポで御経を唱えると、ほとんどの人が、つかかるか、いつしよに唱えることが出来ないのではありません。挙句の果には、「修行が違う」とか「そんなにきつちり出来ない」というのであります。

つまりこれは、速いテンポの時には誤魔化されるものも、遅いテンポになると誤魔化せなくて唱和出来ないということにはほかならないのであります。

昭和五十六年に福山の地に布教所を開かせていただき、事あるごとに御経の読み方を信徒に注意して来ましたが、一般的になってしまっている速いテンポの勤行では、一向にらちがあきませんので昭和六

十一年の中旬より五座、三座の御経をしなくて良いから、方便品、寿量品、自我偈をゆつくり二十五分余り時間をかけて読み、その後題目を十分から十五分余り唱え、(朝の勤行の天拝はする)五座、三座の御観念をまとめてして、勤行とするようにと御願いしました。

気が散って、「十如是」が何回目か分からなくなつて、二度で止めたり、四度してみたり。今やつている勤行が何座目か分からなくなつてしまつたり、そういうことばかりに気をつかう勤行。まちがった早口の、自分さえ良ければいいというような自己満足の勤行を、五座、三座と繰り返すよりも、少しでもまちがいのない、ていねいな、心の込められる勤行題目の方が、どれほど信仰にかなうかしれません。

創価学会員の暴発的な増加によつて、元来地元の僧侶からの口写しで習つていた御経がまったくなくなつてしまい、初信の頃より、集団で唱える、くずれた御経、題目に染つていつてしまったことが今日の勤行の現状になつていふと思う。そしてこのような信徒の姿は多勢に無勢で僧侶達もこの影響を強く受け、御経がくずれていつたものと思うのであります。

す。

御経に関する読みは口写しで伝承されて来た為、ほとんどその資料というものがありません。このことも乱れるに任せられて行く大きな要因だと思えます。しかし一方、創価学会員の増加の中で、それ迄大雑把で各末寺バラバラに任せていた勤行用式を儀統一という名目のもとに五座、三座とし「世雄偈」の廃止を創価学会の要望をも受けて決定したのであります。それ迄は五座全てに長行を唱える末寺もあり、それに「世雄偈」を加える末寺もあり、あくまでも簡略にすまざる末寺もありで、一様ではなかったわけであります。一様式にすることは良いとして、ここで「世雄偈」をすてるという愚を犯してしまつたわけであります。

創価学会の要望と、簡略に走る希望が一致して、「世雄偈」を廃止したにもかかわらず、大石寺はそれから何年も教師補任式に望む段階の最終試験には「世雄偈」の読みを試験課題として入れ続けていたのであります。なにかしらゆがんだプライドのように思えるのであります。

日達上人も、現日正寺住職、秋山海学師を我々小

僧もいるような場所で「まだ世雄偈を読んでいるのか、やめろよ」等といつていたことを私は記憶していますが、組織の統一性、画一性の前に、もっと大切にしなければいけないものがあるのではないかと思うのであります。

現在あたり前のようになっている五座、三座の勤行式にしても、資料も口伝もありませんから、勤行要品によって推察すれば、明らかに大聖人御在世にこのような勤行型体になつていたはずはないのであります。

初座（天拝）はともかく、二座の御本尊様を除く、大聖人、日興上人、日目上人、歴代御正師等の御報恩謝徳に供する御経は、まったく後世のものであつて、五座、三座、の型式は大聖人の御在世にはなかつたはずであります。

日興上人の御報恩は日興上人滅後に加えられたものであり、日目上人、歴代等の御報恩は日目上人滅後に加えられたものであり、修行としての原型と、時代と共に変型、応用されていったものとして考えた時に、原型をはずれて、応用が永年の慣習によつてあたり前と考えられる状態になつてしまつている

のであります。

私は五座の勤行式は、日興上人、日目上人が亡くなられるにつれ、大石寺法門の上において、日興上人を、日目上人をどの様に位置付けられるかということ、観念文の中に示したと思うのであります。加えて大石寺の諸堂が完成整備がなされて行く状態の中で諸堂を巡つて一座ずつの勤行をされていたと思うのであります。

たとえば日正上人の時に、垂迹堂をつぶしたという。御影堂の茶店の所に、天拝の御経を読む御堂が建立されていたといひます。御影堂は大聖人在世そのまゝに写された意味がありますから二座の本因妙教主の御観念の経に合うことになりませぬ。戒旦本尊の揺拝、客殿、大石寺の法門の基本を成す諸堂において一座ずつ御経を供えるということが勤行形式の姿であつたと思うのであります。今日でも一夜番が御華水を汲んで諸堂を巡り御水を供え、そして御経を唱え次々と廻つて行くのは、その原形を汲む姿ではないかと思ふのであります。

そしてこの形体が永年の内、雨、風の日、多人数となり、一ヶ所の堂において、五座、三座の勤行を

するといふ形体に落ち着いたものと思ふのであります。

私は五座、三座が原形ではなく、五座、三座の観念に込められた、法門といい、信仰の真心は大切な絶対のゆるがせにすることの出来ぬものと思ひます。しかし、それとは別に勤行式の本来の姿は、方便品、方便品長行、寿量品長行、自我偈、題目、これが大聖人の定められ、大聖人のされていた姿ではないかと思ふのであります。

つまり勤行とは、日蓮大聖人の教義とはなんぞやといふ問いに答えられる簡単明瞭な看板であると思ふのであります。

もちろん勤行の中心は題目であります。今日の様な、早口で忙しそうに、何を言っているのか分らない御経の唱え方、そして、御経の後の三分五分位のお茶漬サラサラの様な題目では、口では、御題目こそが根本と言つていても、その姿を見れば、題目を中心、根本にした勤行とはいへませぬ。

方便の扉を開く、寿量品の扉を開く、文上から文底へと、文底の大聖人様の題目に出合い、題目を信受する。これが大聖人の法門であり、勤行でありま

す。

方便品の十如是迄は略開三頭一の内容であります。

略開三頭一とは、略して（おおむね）、三（法華経以前の声聞、縁覚、菩薩の三乗の教え）を開して（明らかにして）一を（一乗の法華経）を顕わす。ということでありませう。

方便品の十如是迄では、内容の点からいって、三乗への説法は方便ですよ——という所迄の意味内容で、三乗に説いて来た説法は一乗へ誘う方便ですよ——という所迄しか示していません。

次に「世雄偈」の部分に入っていて、広開三頭一が説かれるのであります。広開三頭一とは、広く（全体に）三乗の教えを開して（明らかにして）一を顕す。ということ、内容は、略開三頭一が、方便ですよという意味内容にとどまっていたものが、三乗への方便の説法をすてて、真実の一法へ導く——という方便品本来の役割りをここに示しているのであります。

法華経は爾前述門の化他の経と違い、自行の経、たということをいいます。つまり衆生の側に合せた隨他意の御経ではなく、仏の本懐を示した隨自意の経

だということをいいます。しかし仏は、序品から、方便品の広開三頭一の説教に入つて来て、はじめて自行の説法をするわけでありませう。

「会中有。比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。五千人等。即從座起。禮仏而退。——」

五千人の僧上慢の衆生が退く姿があつて、そこからはじめて仏自身の自行の経が示されて行くのであります。ですから五千人退座の後にすぐ一切衆生に対する因縁と慈悲（一大事因縁）を示し、開仏知見、示仏知見、悟仏知見、入仏知見の諸仏世尊の四仏知見を示すのであります。

「世雄偈」の最後は

「諸仏如来。言無虚妄。無有餘乘。唯一佛乘。」
であります。これは、

諸仏如来は言（みこと）虚妄なし、余乗有ることなく、唯一仏乗のみなり。

と示して、当宗で方便品を所破借文の為に読むという意味は、略開三頭一だけではその意味は不満足であり不充分であり、略開三頭一（実は方便なんですよ）、広開三頭一（方便だからすてなさい）の二つが一つになつてはじめて、破折する為に方便品の

文を借りるといふ所破借文の意味が通じるのであります。

方便品の中に三乘方便の破折を含む。それ故に当宗において「世雄偈」を読む必然と必要があつたのであります。

「唯一佛乘」として、所破所用の寿命品につながつて行くといふ所が大切な所なのであります。

四之坊の住職であつた松岡慈契師は、最近でも柱師は世雄偈を読まれていたが、堀上人はそれをおやめになり、開師がまた御遠忌あたりになつてお始めになつた。それが恭師の頃まで続いたようで、世雄偈をやめたのは戦後になつてからです。時の猥下の考え一つで読むかどうか、お決めになつていたようですね。

(蓮華'76 12月号58P)

この様に世雄偈はその時代、その猥下の好嫌によつて読んだり読まなかつたりで来たようである。それは方便品は助行だから二の次のことだといふ意識が動くからであらう。次に寿命品長行よりもはるかに長いといふこと、長い為に時間がかかる、御経本が必要になる、速く読めない、くずせない等々、めん

どくさがりには悪い所づくめなのであります。

私は先に書いた理由から世雄偈は読むべき御経だと思ひます。私は、六十一年の九月から半年間朝夕の勤行の一折に読みはじめ、最初は一時間ぐらひかかりましたが一ヶ月位いで三十五分ほどで方便品から自我偈迄唱へることが出来るようになりました。そして六十二年の三月から、良いことであるならば、出来ることであるならば、自分だけがするのではなく僧俗共々にした方が良いと思ひ、信徒にもすすめました。すると案の上、他の僧侶から

- 。方便品は助行だから
- 。信者が混乱する。
- 。今迄のやり方で充分
- 。よその寺でしていけないものを
- 。正信会としてすすめていけないものを
- 。今迄やつていないものを
- 。うちだけやつてまぢがつていゝのでは
- 。今迄の勤行でも長くて大変なのに
- 。近年の猥下でさえもなくしたのに
- 。住職がやるのは勝手だが、信者はやる必要がない
- 。読んでいゝといふことをひけらかしてゐるんだ

。世雄偈を読んでいるという慢心がある
。五座、三座の化儀を軽んずるのか

。やるならば、五座、三座、全部に「世雄偈」を読まなければおかしい

。「世雄偈」を読むと、廣田の今迄の主張を認めることになるから読まない

。読んでも読まなくてもいい御経なら読まなくていいではないか

。日蓮大聖人様が読んでいたかどうか分らないじゃないか

。日興上人でも小僧が憶えないことを理由に止められたぐらいいんだから重要な御経ではない

。一番大切な法要に何故読まないんだ
等々、色々な意見がありました。

私は単なる化儀として、時代によって変化自由とか、猊下によって変化自由等と勤行を考えることはまちがいであると思います。

七〇〇年来の仏法の流れの源で、大聖人、日興上人、日目上人と、あたり前のごとく御読みになられていた信仰の姿であって、そのことを私達はうかつにも知らなかったのであります。

時の猊下といえども不読を論ずることの出来ない法門なのであります。

正式には読むのだが、この御経では略そうというのであれば、まだ経文の意味内容が心に留まっているということでありますが、省略していることも、経文の内容も忘れ、見下し、今日の姿があたり前と考えているのであるならば、本来の教義を忘れ、当宗においては、法華経をどのように拜して行くのかの法門の基盤を忘失することになるのではないか。

ナンミヨウホウレンゲキヨウとあたり前に正しく唱えることも出来ず、

ナベオホレナベオホレとかナキヨナヨとしか聞かない題目と思い込んでいる呪文を唱え、百万遍唱えただ、マヌ目を塗っただ、題目を唱え乍ら手には改札口のカウンターをカチカチと打ち、十五分で五座の勤行をしたと自慢したり、

こんな悲惨な創価学会員の姿を見て苦しまない人間は商人であって僧侶とはいえないのではないか。

元来、御経とはマイクがなくても百人、千人の人間が一同に会しても唱えられるようにつくられてい

るものであります。

僧侶自身の勤行も、本山での丑寅も御開扉も、まるで機関銃のように、マイクなしでは成立しない御経と化してしまっているのです。

マイクがなくても自然に唱和出来る速度。それが本来の読経であります。題目にしても太鼓にリズムを刻める速度はおのずから決っています。それが自然の速度であり、その流れにそって御経を唱え題目を唱えることによって、安隠とした気持に満たされるのであります。火事場の半鐘のような速度で、本当に御経を読み功德を積まさせていたのだという気持になれるかといえは、私はなれないと思う。そしてそればかりか修行することを自他共に軽んずるようになると思える。

読まなければ誑法だとか、成仏出来ないということをおいつているのではない。読めば利益があるといっているのでもない。

毎日の修行の中で、何故方便品を読むのか、読むならば、どういう意味内容が含まれていなければならぬのか。読めない理由がないのなら、良いことならばすばいではないか、このように私は思

う。「世雄偈」は法門的に取りはずし自由のものではない。

②

芝川6号で「勤行について考える(一)」として発言した所、何人かの反響と問い合せがあった。中でも、読みたいのだけれど、どういう方法で読むのかとの質問が多かったので、最初にそのことを書せてもらいたいと思う。

世雄偈を入れた時の勤行の仕方

朝の勤行の時の天拝は通常通りであります。

正面に向き直って、方便品、十如是の三返繰り返しはしないで、そのまま通して読み続ける。鈴も当然打たない。世雄偈の最後にきて、便宜上「唯一仏乗」の「乗」を心持のぼしつづ読み、壽量品に入るにしたがつて三打し、読み続けて行く、あとは常の勤行式と同じであります。

十如是三返読誦の意味

話しづいでになりますので、「世雄偈」を入れて読む時には、十如是の三返読誦をしないことから述べたいと思います。

十如是を空、仮、中の三義に解釈して三回繰り返して読むという風に理解されていると思いますが、それでは何故世雄偈を読む時にそうしないのか、ということになります。

十如是を三回読むことによつて世雄偈を略すという意味の方が重いと思えるのであります。つまり、三返読誦するから空、仮、中になるのではないということでありませう。

一に如是相、如是性……の仮諦の義は、初めの相も、終りの報も、平等に顯然とあらわれて、區別、差別された姿を表わす。

二に是相如、是性如……乃至本末究竟等如とは、空諦の義を顕わし、初めの相も終りの報も、平等に空寂無相の一味平等を表わす。

三に相如是、性如是……乃至本末究竟等如是とは中諦の義を顕し、相にあらず、亦無相にあらず、乃至報にあらず、亦無報にあらず、本末平等に中道

実相なるを表わす。

ということでありませう。つまり、十如是の經文を区切る場所によつて、仮諦、空諦、中諦の三義を持つということがあります。

如是相、是相如、相知是

と、なるんだというわけでありませう。しかし、三返読誦の時には、三義の区切りと発音で読むということとはしません。心でその意味を拝して行くということであつて、実際には世雄偈を略して抜く為に三返読誦をしているという意味の方が強いということなのであります。

三返読誦が不可欠のものであるならば、世雄偈を読む場合も不可欠のはずになるはずであるし、空、仮、中の三義読みを云々というならば前に挙げた区切り読みをしなければおかしいということになります。

以上のことから重ねて、世雄偈を略す意味から三度繰り返す読みが定着したのではないかと思つてあります。